

# 盛岡三高参加型授業の取組



参加型授業：生徒全員が、50分間、主体的・能動的に取り組むような授業

## ● 盛岡三高参加型授業4つのポイント

- ① 知識・技能を教師が一方的に注入するのではなく、双方向・多方向から展開される授業
- ② 生徒が聴く、書くだけに終わるのではなく、考えること、気づくこと、発信することができるような活動を取り入れた授業
- ③ 教師の充実した教材分析によって、生徒に納得と安心、信頼感を与える授業
- ④ 言語活動を通して生徒の思考・判断・表現が一体的、循環的に進められる授業



## 盛岡三高参加型授業・4つのキーワード

### その① 観点別評価

平成19年6月に公布された学校教育法第30条には、次のように記されています。

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、**基礎的な知識及び技能**を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な**思考力、判断力、表現力その他の能力**を**はぐくみ、主体的に学習に取り組む態度**を養うことに、特に意を用いなければならない。」

これは、学力が法によって初めて定義された画期的な条文です。アンダーライン部分は「学力の3要素」としてまとめられ、それと対応して観点別評価の4観点と結びついています。

現代は、世界が成熟し、グローバル化される一方で、高齢化や格差、紛争、貧困などの問題も生みだされています。このような中、学力とは、知識量や技能の優劣を問うだけでなく、国際社会に貢献できる有意な人物を育成すること、そして、その上で自身の生活の質を高めるという視点で捉える必要があります。

そして、そのような学力を評価するためには、まず、それを問うような授業が行われていることが前提となります。つまり、観点別評価を行うことは、そのような観点を観ることができるような授業を構築することに他なりません。

それが本校の目指している参加型授業です。

### その③ 絆を生み出す授業

少子高齢化、グローバル化などの時代の変化や、ネット犯罪の多発、いじめなど、現代社会における諸問題への対応が求められている現在、生徒指導は、進路指導や教科指導など全教育活動の中で推進していく必要があります。

平成22年に文科省から出された、生徒指導の基本書と呼ばれる「生徒指導提要」では、教科指導における生徒指導の観点として、以下のものがあげられています。

- ① 授業の場で生徒の居場所を作ること
- ② わかる授業を行い、主体的な学習態度を養うこと
- ③ 共に学びあう意義を確認させること
- ④ 家庭学習を充実させること
- ⑤ 言語力を養成すること

授業は、教師が生徒に知識や技能を伝える場であるとともに、授業という生きた空間の中で、生徒や教師が互いに向上しあい、人間として成長していく場でもあります。

つまり、授業は、教師と生徒の対話、生徒どうしの教えあいなど、様々な活動を通して、他人に敬意を払うこと、互いに尊重し、相互に理解しあうことを育む場でもあります。授業を通じて、生徒どうし、教師と生徒の絆を深めるためには、生徒が主体的に参加するような授業改善が私たちに求められます。参加型授業が目指すところはそこにあります。

### その② 教員の協働文化の醸成

学校での教育活動の成果は、教師の力量や、生徒の能力・主体性に依存します。しかし、個々の力量の集積に頼るだけの教育活動には限界があり、時に、模試や試験で他よりよい成績を残すことなどといった、狭い範囲での個々の競い合いという状況を生みだします。

「参加型授業」をスローガンとして掲げ、全員で共通理解して、授業改善に取り組むことは、学校として生徒にどんな学びを保証したいのか、学校の教育目標を具現化し、共有していく過程でもあります。

そして、全体で取り組むことで、「私の授業」という閉じた見方から「私たち同僚の授業」という意識への変革、つまり、教師の同僚性が育まれることが期待されます。そして、いつでも授業、教育を論じ合えるような学校空間、授業を軸とした教師文化が形成されていくと考えられます。

教師が協働することにより、岩手の将来を担う、特に、震災復興の中核となるべき、「学び」へのこだわりを持ち、高い学力と、自ら考え、発信することのできる生徒を育成することが私達盛岡三高の教師の使命でもあると思います。

### その④ 社会が求める問題解決能力

2000年から始まったOECDによる国際的学力調査PISAでは、2015年からこれまでの「読解」「数学」「科学」「リテラシー」に加えて、新たに「協働型問題解決能力」が加わります。

現在においては、1人の天才を待って社会が進展していくのではなく、分野や領域の横断、そして、国境を超えた中で、の協働型の問題解決や研究開発が行われる時代になっています。

このスキルの提唱者は次のようなことを言っています。  
「今日では、知識の蓄積はGoogleで入手可能であり、授業は知識の伝達、蓄積の場というより、**考え方・創造性・批判的思考力・問題解決力・判断力の育成を行う場として意味を持つ。それにより協働やチームワーク、ICTを使っていかに社会と関わり合うかが重視されていく**」

このような中で、学習指導要領においても、言語活動の重視などの方向性が出されています。

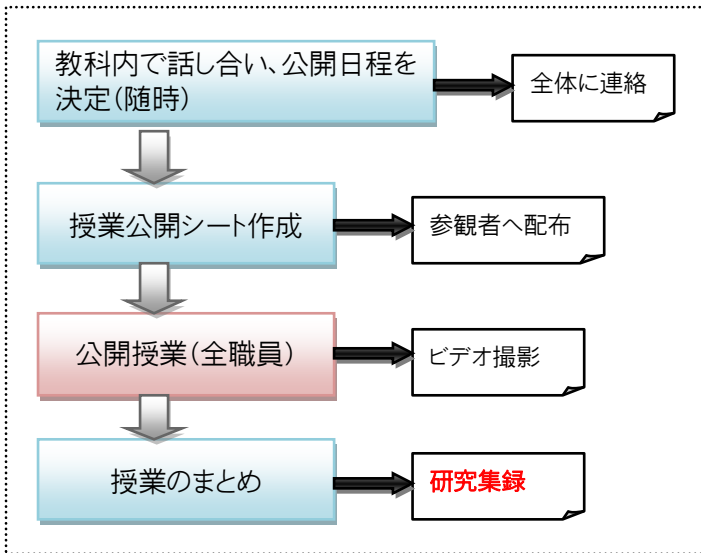
そういう意味でも、盛岡三高の参加型授業は、生きる力を培う進取の取組みであり、今後も継続し、先頭を切ってその姿を全国に見せていく必要があると思います。

# 盛岡三高参加型授業 今年度の主な取組

## 公開授業の実施

全職員が1回公開授業を行います。また、日常の授業は常時オープンにして、互いに学びあう環境を築きます。

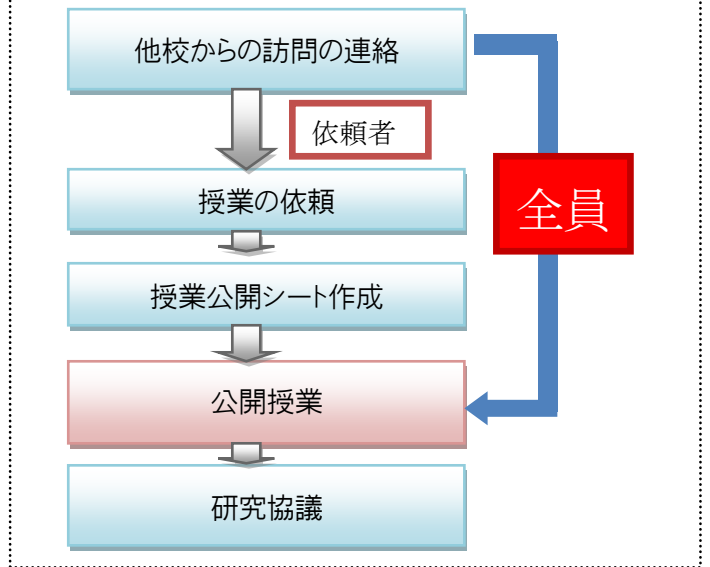
### ● 授業公開の流れ



## 訪問者への授業公開

地域・他校の訪問者による授業参観の依頼を、授業力向上のよい機会であると捉え、依頼科目の授業だけでなく、全職員が授業公開を行います。

### ● 訪問者に対する公開授業の流れ



## 校内授業力向上研修会の実施

9月・11月の考査期間中に職員の校内研修会を実施します。また、定例職員会議で、実践発表を行います。

### ● 校内研修会の主な実施内容(予定)

- ・実践事例発表
- ・授業動画を用いた授業研究
- ・職員による模擬授業
- ・講師を招いて行う講義・演習

## 「参加型授業」発信の取組

### ● 授業動画作成

積極的に授業動画を作成し、授業者自身の省察に役立てます。また、ライブラリとして共有化するためのコンテンツを作成し、外部への提供も行います。

### <参考> 動画コンテンツ

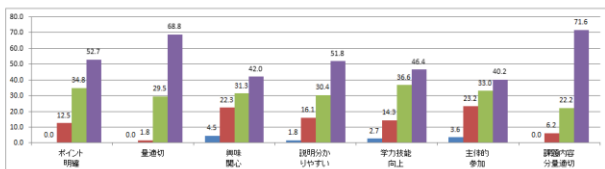
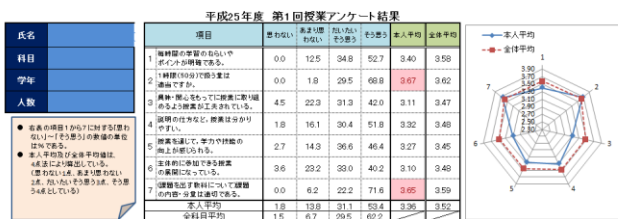
左:校内 LAN 上で共有している動画ライブラリ

右:平成 24 年度作成の授業動画 DVD(全職員視聴)



## 生徒授業アンケートの実施

昨年に引き続き、生徒による、授業アンケートを実施し、その結果を、授業者に還元し授業改善を行います。



<参考> 授業者に渡される個票(7項目評価)

### ● 校内研修用の研究集録・通信の発行

1年間の公開授業を研究集録としてまとめ、授業力向上のために活用します。また、「参加型授業通信」を適宜発行して、職員間の意識の高揚を目指します。

## Q & A

**参加型授業とは、ペア・ワークやグループ学習を取り入れた授業を行えば良いということですか？**

ペアワークやグループ活動など、ピアサポート活動を取り入れることで、生徒のモチベーションが高まり、アクティブな授業が期待されます。しかし、だからといって、単に形式的に「グループでの話し合いを入れる」ということでは、その効果は期待されません。

逆に、ややもすると、生徒の集中力が散漫になったり、教師がコントロールを失って、単に楽しんで終わっただけ、といった「活動ありて学びなし」という授業になりかねません。グループ活動を取り入れる場合は、タイミング、時間、頻度を考えるとともに、クリティカルな考えを育てる視点や、個から全体、そして個に返す活動などを考慮して授業を組み立てる必要があります。

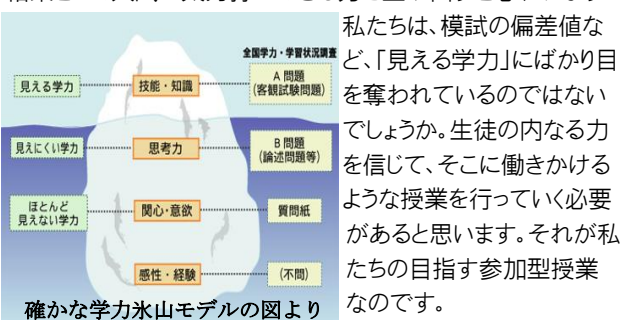
**参加型もわかるが、結局、センター試験などに太刀打ちできる学力がつかないのでは？**

このことは、教育におけるダブルバインド問題といわれ、これまで多方面から問題提起されてきました。ドイツの教育学者ヴィットマン氏は今から 15 年前に次のような話をされました。

「技能の習熟」と「探究心・自発性」は一方を強くするシステムが働くと、もう一方が軽視される傾向がある。その両者を同時に進めることができるような学習環境や、授業の設計の必要性が 20 世紀終盤から世界で謳われ、パラダイムシフトが起こっている。

このような問題意識から、世界各国で授業改革が行われてきました。確かに、諸外国に比べ日本は遅れているといわざるをえませんが、センター試験を始め、大学入試でも、知識・技能一辺倒の問題にならないような方向に舵が切られています。

また、大学入試で太刀打ちできる力とは、教師が行うレクチャや教師が与えるテキストによってのみ育つものではありません。むしろ、生徒が自分で学ぶ気持ちを起こさせるような授業が、結果として入試に太刀打ちできる力を生み出すと思われま



**生徒の表現や発信はどのように評価につなげていくのですか？**

それぞれの観点を評価する場面を、毎時間細かく授業の中に設定していくのは難しいと思われま

**言語活動を表に出した授業は毎時間行うものではないですか？**

毎時間、表現や発信を中心とした授業を行う必要はありません。時には、長時間演習に取り組みさせる活動や、原理などの説明に教師が一方的に講義する場面もあるはず

また、毎時間必ず評価の 4 観点を

**言語活動とは、生徒に発問したり発言させたりする活動のことですか？**

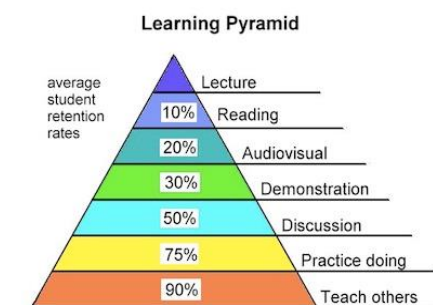
今回の学習指導要領で大きく変わった点は、評価の観

旧	新
関心・意欲・態度	関心・意欲・態度
思考・判断	思考・判断・ <b>表現</b>
技能・ <b>表現</b>	技能
知識・理解	知識・理解

中教審によると、「表現」は従来の技能的な表現(プレゼンテーション力など)ではなく、言語に類した思考の言葉による表現という意味であり、思考と表現は一体的・循環的に進められるものと説明されています。ですから、言語活動には、「大きな声で音読する」「元氣よく手を挙げる」などは想定されま

**基礎基本を注入することが、まずあるべきではないか。その先に参加型授業があってもいいのでは？**

まずは基礎基本。その通りだと思います。でも、基礎基本を教えるのだから、一方的な授業で良いということではありません。むしろ、基礎基本を教えるときこそ「参加型授業」が必要ではないかと思



## 参加型授業の一例（本校で行われた授業）

### ● ICT の活用



#### SS 数学 I (五日市教諭)

相関行列から多変量の相互関係という、教科書を越えた高度な問題解決の手法について、ICT機器やグループ討議を通して多角的に分析する授業。

### ● 協調学習（協働型問題解決）



#### 数学 II (浦和高校野崎教諭による提案授業)

「エキスパート活動→ジグソー活動→クロストーク活動」という東京大学 COREF が提供するアクティブラーニングの一手法が、昨年度本校生徒に実施された。この手法は現在全国に広まっている。

### ● プレゼン・ディスカッション・ディベート



#### SS 英語他 (1・2年英語科の授業)

NS と合同で行うディスカッション、英語によるポスタープレゼンテーション (1年 SS 英語)、英語ディベート (2年英語 II) など、本校英語科では、生徒のスピーキングアクティビティを中心とする授業が積極的に展開されている。

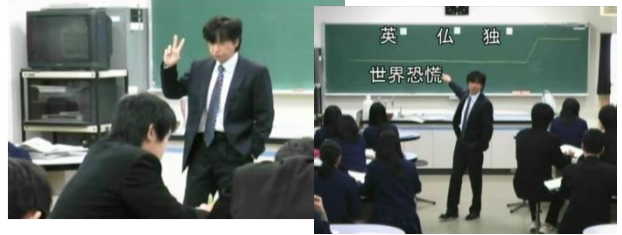
### ● 複数の活動を取り入れた授業



#### 物理 (畠山教諭)

単に講義と演習だけではなく、自作教具の提示や、生徒を参加させた演示実験など、複数の活動を取り入れ、生徒を積極的に授業に関わせる仕掛けを施している。生徒は興味関心が引き出され、チャームが鳴っても自発的に実験・観察を続けている (右写真)。

### ● 発問で働きかけていく授業



#### 世界史 (駒込教諭)

教師の巧みな発問により、立論させ、否定的立場で反駁させ、正しいと思う根拠を考えさせながら止揚されていく授業。生徒のアクションは少ないが、思考・判断・表現がぐるぐる循環する参加型授業である。ハーバード大のサンデル教授の白熱授業のイメージ。

### ● 言語活動



#### 地理 (鈴木指導教諭 (現教育センター))

インプットされた教師の説明を、グループ内での言語活動によってアウトプットすることで定着を深める。スピード感溢れるアクティブな展開により、生徒の思考が活性化される。最後は、グループ内でのまとめ発表を行い本時の内容が生徒の頭に明確に残る。

### ● グループ学習



#### 国語 (菊地教諭)

発問や対話、生徒の発言を束ねながら、教師が適切に舵を取り、学習者の主体的な活動を促していく。結果、深い学びが起き、生徒が高所に導かれる。グループ学習は「机をくっつける」という形態にこだわらなくても可能である。

## SSH と参加型授業

本校の SSH では「科学的探究力」「発展的対話力」「論理的思考力」という3つの力の育成を目指しています。そのためには、ラボなどのサイエンス教育だけでなく、SD 総合でのプレゼンやディベート、そして日々の授業こそが、3つの力を育てる大きな場です。下図は 1 年生の SSH 事業のイメージです。

